

おかやまアーツフェスティバル2024

岡山市民の文芸

第56回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

笑顔のポイ活

實 近 裕 美

心の中でこっそりとポイ活をしている。

誰かを笑顔にしたら1ポイント。

ポイントを集めても何とも交換できないけれど、ただ毎日集めていく。

近所の方におはようございますと挨拶をする。

すると笑顔で挨拶が返って来る。

これは簡単、1ポイント。

運転中に道を譲ってもらったのでありがとうと片手をあげる。

すると相手も手をあげてくれた。

よく見えないけど笑顔だった気がする。

おまけの1ポイント。

買い物レジで前に並んでいる、抱っこされたあかちゃんがこちらを見ている。

笑顔をつくってあやしてみる。

あかちゃんは不審そうにじっと見ている。

これはちよつと手ごわそうだ。

今度は変顔を試みる。べろべろばあ！

抱っこしているお母さんがこちらに気づいて少し笑いながら、ちよつと頭を下げた。

その様子を見たあかちゃんがにこつと笑った。

めちやくちや恥ずかしい。

だけど2ポイントゲット！

私は心の中でこっそりポイ活をしている。

今日は近所の方と車の誰かさんとあかちゃんとお母さん。

笑顔ポイントは4ポイント。

みんなの笑顔を思い出しているうちに、自分も笑顔になっていることに気づく。

はい、もう1ポイント追加。

◇岡山市教育委員会教育長賞

竹林に立つ

高山秋津

MASAKOみちと

母の名を付けた道を歩く

竹林に続く道だ

無性に

竹の直線に会いたかった

上へ上へと天に向かい

すつくと伸びた生命の側に

立ちたかった

竹は変わらず

しんと静かに待ってくれていた

清冽な香を放ち

己の時間を光らせている

今 ここにこうして在るとい

私を大きく貫く真実

母を送って 二年が過ぎた

生きることの荘厳さ

決して揺るがない強さ

母から 竹から 教わったことは無数にある

私はそこから

何を理解し 何を背負い

何を下ろしたのだろうか

きょうは一人で竹林に立つ

受容という静けさの中に立つ

息をするのも苦しいほどの寂

しさという罪を

竹の群れが吸収し浄化し

消し去っていく

母もこの中の

一本の竹になったのかもしれない

茜色に染まりかけたMASAKOみちを

帰りながら

漸く心に一つの句点が打てたことを

感じていた

彩雲

山本照子

磨りガラスの窓の外で
誰かが私を手招きしている気配がする
葱を刻む手を止めて庭へ出た
いつもの習慣でまず空を見上げる

あつ彩雲だ
思わず叫びそうになった
雲を浮かべた青い空にひろがる
五メートル四方の七色の輝きは彩
雲以外のなにもでもなかった

私は三歳のとき母親を亡くして
父親に育てられた
父は私を膝にのせては度々語ってくれた
父の生まれ故郷の十津川村の空に浮かぶ
彩雲の美しさを
彩雲のはかなさを
いつしか彩雲は私の夢の全てとなった

父は六十年前に死んだ
私が二十二歳のときだった
いくら叫んでも父は帰ってこない
寂しいとき 悲しいとき
彼岸に住む父と共に絵筆を持って
彩雲を
より美しいものに より神秘的なものにと
染め上げていった

一度も彩雲を見ないままに歳月は流れた
庭に立って彩雲を眺めているうちに
父の声が 父の膝の感触が
一気に蘇ってきた
窓の外から
誰が私を呼んだのだろうか
なぜ今 彩雲は私の頭上に
あらわれたのだろうか

長い歳月に脳裏から消え去っていた彩雲は
きっと父と私だけの
再びの始発駅となってくれるに違いない

ゆで加減

岡田房子

ゆで卵は固ゆでが好きだ
最初は中火で五分間 次に弱火で八分間
静かにコトコトゆでる
ゆで上がるとポコポコ泡が浮く
そのあと 冷水を流す
この時間を守れば 固ゆで卵のできあがり
時間を計り間違えたり
ほんの少し火加減を油断したなら
殻を剥いたとき 半熟の黄身が顔を覗かせる
どうしようもなくながっかりする

体の具合が思うように
回復しないことを嘆く友人

「少しづつ良くなっているわよ」
励ますつもりだった

「でもね……」

何か云おうとするのを 私が遮った
「もう前を向いたらどう？」

彼女の顔が歪んだ

もどかしく思う気持ちに

彼女自身が気付いていたのに
きつといつもと同じように

頷いて欲しかったのに

彼女はその言葉を

受け取りたくなかっただろう

冷えた空気の中

お互いの心の中を行ったり来たりしながら
ひりつくような時間が刻まれる

どう繕ってよいのか、惑う

ほころびを縫い合わせるように
こころを込めて云う

「……ごめんなさい」

何度作っても 卵のゆで加減は難しい
人との関係の難しさにも似ている
卵をゆでるように
殻をそつと剥くように
静かに心の中で言葉を温めて
決して煮溢さないように……

現在地

田房正子

人生の節目の年を迎えた
干支が一巡りするあの年である
二十代には考えてみたこともなかった
あの頃は その時その時が一番大事で
どこを見ても 鏡の中にも
何十年も先の自分なんて見えもしなかった
三十代は仕事と慣れない子育てに四苦八苦し
足元がおぼつかず転んでは母と夫に助けられ
そんなことを繰り返しながら走っていた
四十代になると 仕事も家事も子育ても
全てを自分がやりくりしている気になつて
もう どこを指しているのかも
わからなくなるほどせわしない毎日を
母も夫もはね飛ばすほどの勢いで進んでいた
五十代になり 二人の娘たちが成人し
ずつとそばで一緒に暮らした母を看取り
気づくと 今の自分がそこにいた
通勤の途中 大きなガラス扉に映る歩き姿を
横目で見て はつとして背筋を伸ばす自分
頑張っている若い人を見ると
心からすごいと思つて
手放しの母親視線で応援している自分
初めての野球観戦に行くというわたしに夫は
「試合が終わるまで観ていると
球場を出る人の波にもまれて大変だから
少し早めに席を立った方がいいよ」と言う
前まではそんな心配 一瞬でつっぱねたで
も今は夫の言葉がよく効く よく沁みる
心配されることが ちよつと心地よくなり
少しずつ変わってきた自分を
案外悪くないと思つている
これが今のわたしの現在地
もしもこの先の道のりに
予想外のハプニングが待っていたとしても
それを「オモシロイ」と思える少しの余裕と
あとは 貯めた経験と失敗と反省を味方にま
だまだ進む もがく 時々休む
たまには強がる 無理もする
ほめてもらえば まだまだ伸びる
これがわたしの現在地

【短歌】

◎岡山市長賞

歩けばこそ見ゆるものあり道の辺の小さき祠におはす石仏

室 常子

◇岡山市教育委員会教育長賞

雨にぬれ色鮮やかに咲く紫陽花葉陰に蛙を雨宿りさせ
眼の前に生後三日の孫の顔大あくびして朱色を増せり
止め・はねにくせを持つ字の愛しさに採点の手を時に止めおり
いい人はいいね太宰の小説のどこかで読んだいい人に会う

吉見 節子
西尾 照常
吉澤 周人
唐川 幹代

【俳句】

◎岡山市長賞

みどり児を丸ごとあらふ春の風

中野 澄子

◇岡山市教育委員会教育長賞

小春日の空を載せ来る大原女
廃校はカフェに轉身桜咲く
雲の峰いよいよ孫は変声期
恙なく過ぎゆく暮しかたつむり

貝畑 信行
室 常子
久山 順子
原田 千恵子

【川柳】

◎岡山市長賞

思い出の道を歩いて影一つ

大本 工

◇岡山市教育委員会教育長賞

ツユクサの青はツユクサだけの青
夕日落つ民の願いを抱きしめて
癖のある菫に清楚な花が咲く
こきぶりを叩き殺して寝付かれず

栗原 由美
市田 鶴邨
岩崎 幸子
筋田 夫美代

【随筆】

◎岡山市長賞

娘からの電話

平 元 薫

月曜日の夜九時過ぎ、テーブルの上のスマホがブルブルと振動した。手に取ると、「お母さん、今ちよつといい」と問う、広島在住の娘の声が耳に飛び込んできた。私は、「どうしたん、何かあったん」と思わず聞いた。彼女は、二か月前に育児休暇が明け、職場復帰したばかりだ。五歳と一歳のやんちゃ盛りの子は、保育園でお世話になっている。

「こんな時間にごめん。心配事じゃないから、安心して。ちよつと聞いて欲しいことがあるんだけど」と、彼女は少しくぐもつた声で言った。私はまず、幼い孫たちが気になって、「いいけど、子どもたちは大丈夫」と尋ねた。「隣の部屋で寝たよ。ウエノさんは、今日から二日間の出張で帰って来ないから、今はちよつと自由な時間なんだ」と、娘は未だに連れ合いのことを名字で呼んだ。自分だって『ウエノさん』なのにと、私は心の中で思ったが、口にはしなかった。そして、長くなりそうだな、と改めて椅子に座り直した。

彼女は話し始めた。「昨日は、お天気がよくて、青空が広がったから、いっぱい洗濯したんだ。それで、物干しだけじゃ足りなくなつて、シーツはベランダの柵に、並べて干したんよ。それが取り込む時に手が滑つて、一枚が下の階のベランダの内側に落ちてしまった」。娘一家は、団地の四階に住んでいる。私の脳裏には、「あつ」と叫んで手を伸ばしている彼女の姿と、直下の三階のベランダの中に吸い込まれていく白いシーツが浮かんた。

「下の方は、単身赴任の男性で、休みの日は大抵留守。昨日も行ってみたらいなかった。ほとんど話をしたこともないんだわ。でも、シーツは回収する必要があるから、『すみません。明朝、取りに来ますので、この中にシーツを入れて自宅のドアノブに掛けておいてください』と、書いた便せんを紙袋に入れて、その方の玄関のドアノブに掛けておいた。それで今朝、起きてすぐに取りに行こうとしたら、我が家の玄関にその袋が掛かってたんよ。きつと遅くに帰つて、わざわざ階段を上がって持ってきて下さったんだと思う。中のシーツはきちんとたたまれて、メモのような手紙まで入っていた」と、彼女は一気に話した。

そこで、「あつ、ちよつとかけ直すわ」と、一旦通話が切れた。すぐに、「ごめん、ごめん」と、電話がかかってきた。「泣き声が聞こえた気がしたから、隣の部屋を覗いてみたんだけど、二人ともちゃんと寝ていたわ」。

「続きを話すわ。メモにはなんと、『いつも子育て、お疲れ様です。頑張ってくださいね』と、書かれてたんよ。『ドンドンしてうるさい』とか、『もっと静かにさせる』とか、苦情の文字が並んでいるんじゃないかと、思わず考えてしまっていたから、凄じびっくりしたわ」と、娘の弾んだ声が続く。

そして、「じゃあね。明日も早いから。聞いてくれてどうもありがとう」と、一方的に、電話が切れた。その声は、いつの間にかとても大きくなっていた。

再燃

皆木恵子

爽やかな春風が湿り気を含んだ初夏の風に変わる頃、わたしは一着のワンピースを試着もせずに購入した。色に惹かれたのだ。

その色は《レッド》、深紅の薔薇を思わせる赤色である。いたってシンプルなデザインとはいえ、やはり「赤」のインパクトは強烈だ。後期高齢者目の七十四歳の自分が着こなすにはいささか勇気が要る。

はてさて、これをいつ着ようかと考えていた時、夫が珍しくホテルのレストランでの食事を誘ってくれた。初お披露目のグッドチャンスである。わたしはまるで少女のように浮き浮きと赤いワンピースを纏い、姿見の前に立ってみた。おう、思いのほか似合っているではないか。顔のシワはこの際無視するとして肌の色などはいつてもより白く綺麗に見える。

気を良くしたわたしは、次にこのいでたち合うアクセサリー選びにかかる。あれこれひとしきり迷いながらも久々にテンションの上がったわたしは、気が付けば鼻歌など歌っていた。

ランチといえどその日の食事はホテル内の高級な和食の店だ。スタッフも皆和服姿で応対している。わたしは、いつもより姿勢良くエレガントな振る舞いを意識し、料理をゆっくりと口に運ぶ。夫はどうかかと思うと、家での食事の時よりむしろガツガツして見える。仕方がない、我が家の食事より大分美味しいのだから。大口で早啮みする様子にささか興醒めしながらも、わたしはわたしで好きな天ぷらでさえ、小口の気取り喰いを貫いた。

その日、一着の赤いワンピースは、花も実もある若かりし頃の自分を思い起こさせ、心を彩り、胸を熱くときめかせた。

一度着て、ためらいの薄れたわたしはその数日後、またあの赤いワンピースを着て近くの銀行へ出向いた。二度目なのでややなじんだ感がある。銀行内はまあまあ混みようだった。幸いにも以前「春らしい装いですね」とわたしのファッションを褒めてくれた方にあたり、またもや「可愛いすね」と微笑まれた。(可愛い？ このわたしが?) ドギマギするわたしに彼女はすかさず続けた。「猫ちゃん」……

そうだった、今日は赤いワンピースの襟元にお気に入りの「猫」のブローチをつけてきたのだった。それも忘れ、可愛いという褒め言葉に素直に反応してしまった。考えてみれば、縦横ガタイのいい自分はそのも可愛いタイプには属さない。おまけに七十四歳の高齢者だ。可愛いと言われる筈のないことはとうに自覚していたつもりなのだが……。結局猫のブローチのことと分かるや、自ずと納得の頷き……。ところがその後、窓口のその人は間違いなくわたしに向かって「赤がお似合いですね」とさらりと言ったのだ。

嬉しい！ 褒められた喜びに単純に胸が躍る。

やっぱり着たい色は年齢など気にせずこの先も着よう！

いつからか胸の奥底に燻っていた残り火が再び炎と化した瞬間だった。

「そ」だったんだ

里村むつき

おせいさんもカモカのおっちゃんも、いなくなってしまった。

近々私は入院する予定だ。また、体を切るのだ。手術を一個二個と数えるのかどうかはわからないが、覚えていた範囲で書き出してみると、十個も手術を受けていた。

二個目の手術は第一子を懐妊して間もなく見つかった左卵巣チョコレート嚢腫の切除だった。体が安定期に入ってから、左卵巣の腫れた箇所を切除した。その入院の際に持ち込んだのが、田辺聖子さんのエッセイ数冊だ。おせいさんとカモカのおっちゃんが繰り広げる、くだけた楽しい本である。手術は無事に済んだが、なにしろ妊娠中だ。用心して入院は少し長引いた。おかげで、暇な私は来る日も来る日も二人に笑わせてもらった。

その後も出産や手術などで入院を重ねてきた私だが、おせいさんたちが入院に付き合ってくれたのは、第一子妊娠中の暇な一回きりだった。それが、このたびは久しぶりにおせいさんとカモカのおっちゃんに同行してもらおう気になった。

どうしてこの二人の本はおもしろいのだろう。先日手に取ってページをめくるうちに、「ああっ」と思わず声が出た。

カモカのおっちゃんがおせいさんの所へ登場する時の「あーそびーましょ」の「そ」が、キープポイントだった。

確かに「そ」の字は、上が続いているのと離れた「ソ」の書き方がある。教科書では前者が採用されているらしいが、私にはどっちでもいいことだ。こうあらねばならないということもなからう。

だが「そ」を見慣れた中で、おせいさんとカモカのおっちゃんが綴られた本の「そ」は、「ソ」の「そ」だった。これだ、「そ」だったんだ。もちろん田辺さんの筆致も十分心地よいが、おっちゃんは「ソ」の「そ」でおせいさんを誘っていて、これが格別に楽しい雰囲気醸し出していたのだ。

あの頃の文藝春秋が、全て「ソ」の「そ」を採用していたのか、田辺さんのご意向だったのだろうか。しかし、裏表紙のあらすじ欄の「あーそびーましょ」は「そ」だ。文藝春秋の都合によるものかもしれない。ワードでいろいろとフォントを出してみたのだが、きれいな「ソ」の「そ」が見当たらない。どうにか岸本楷書体が近いかなという感じだ。

おっちゃんの「あーそびーましょ」は、やはり「ソ」の「そ」こそ、あらまほしけれ。

香川医科大学（現在は香川大学医学部）附属病院のベッドで思いっきり堪能してから、「そ」の持つ魅力を発見するのに三十五年も費やしてしまった。おせいさんとおっちゃんは、暑くなってきたので冷酒とお刺身と焼き茄子などでご機嫌になりながら、私の発見を笑ってくれているような気がする。

さてと、ここまで書き留めて一旦筆を置こう。あとは退院して落ち着いてから、推敲なり清書なりをするとしてしよう。

一粒の米

内山 秀樹

トイレに座っていたら、ふと視線の先に米粒が一つ落ちているのに気が付いた。トイレになぜ米粒が？という疑問と共に、さてこの米粒をどうしたものか？ その時思いついた選択肢は次の三つだった。①米櫃に戻す ②ゴミ箱に捨てる ③トイレに流す

さすがにトイレに流すことには罪悪感があったが、拾って米櫃に戻すことも衛生的にどうかと思えるし、妻が知ったら眉を顰めそうだ。それに一粒では腹の足しにもなるまい。

米一粒の処理で悩むなど、今の若い人には理解できないことだろうが、わたしが育った昭和三十年代は、米を粗末にする者は目がつぶれると親から言い聞かされて育った。

当時、農家で子沢山の我が家では、米は命の糧であるだけでなく、貴重な現金収入でもあったので、食用を切り詰めて出荷した。このため米ご飯を毎日食べられる訳ではなく、麦や芋が混ざること多かつた。芋はともかく、麦ご飯はパサパサして喉を通らなかつたことを覚えていいる。

農家の人が八十八回の手間をかけて作るから「米」と書くと言われるが、冬季の田起こし、春先の苗代作り、梅雨の雨を利用した田植え、真夏の草取り、害虫予防、そして秋の稲刈りと、作業は一年中ある。

田植えや稲刈りは、家族総出、村をあげての一大イベントで、当然子供たちも手伝わされたので、小学校には田植え休みがあつた。山間部の小さな棚田だから、ほとんどが手作業で腰が痛かつた。

わが家では、田植えと稲刈りは子供たちも手伝つたが、他の作業は母が一人で担つていた。五人の子どもを食べさせ、学校に通わせるため、早朝から暗くなるまで働いていた。真夏の草取りや害虫予防はきつかつたのだろう、しばらく寝込むこともあつた。その母の背中がわたしの人生の羅針盤となつた。

時代は移り、米余りの時代となり、減反減反の大合唱の頃結婚した。妻は農作業の経験がなく、農業をさせないことが結婚の暗黙の条件でもあつた。

わが家は当然のように実家から米を持ち帰り食べたが、妻は茶碗に食べ残したご飯を、おかずの残りと共に流しに捨てた。母の苦勞を知っているわたしは、心の中で詫びながらその光景を見ていた。

もちろん、妻に文句を言うのは筋違いというものだ。妻にとって米は米、粗末にしている訳ではなく、食べ残ったご飯を捨てることは、ごく当たり前のことなのだから。米作りを止め、スーパーで買うようになつてから、わたしの米への特別な思いも薄らいだ。

トイレの米粒は、誰がどのように作つたものだろう。今はすべてが機械化されているから、大型田植機とコンバインで大量に収穫された米の中の一粒だろう。

わたしは米粒を手に取り、台所のゴミ箱に捨てた。多少の抵抗感があつたが、時代が変わつたということに許してもらおう。

背中への相棒

植田 一成

通勤や休日の個人的な移動は、乗物を頼らず歩くことにしている。偏屈を気取ったり文明を否定しているつもりはない。自分にとって歩いている時間が心地よく感じられるからだ。

例えば、車好きな人は目的地が無くてもドライブを楽しめるのだろうし、バイク好きな人はバイクを走らせることに快感を覚えるのだろう。私にとって歩くという行為は、それに似ているのかもしれない。

健康の為かと問われることは多い。しかし私の場合、それを意識するなら、平素の暴飲暴食、不摂生を改善する方が先だ。精神的な面はともかく、健康で長生きしたいが故に歩いているのではない。

携行する荷物はリュックサックに収める。思えばこのリュックサックとは随分長い付き合いになった。

小学生時代は遠足の日には背負う程度だったが、中学生になると一気に使用頻度と中に入れるアイテムが増した。弁当、財布、体操服、そして読みかけの文庫本。徹夜で書いたラブレターを運んだのも当時使っていたリュックサックだ。

学生時代は長期休みを利用して頻繁に海外を旅した。格安航空券で渡航し、安いホテルやゲストハウスに投宿する。有名な観光地を見て回るより、現地の生活感に触れる時間の方が楽しかった。滞在先では必然的に徒歩での移動が中心となる。リュックサックを相棒に各国の街角を彷徨った。

パソコンやスマホの無い時代。限られた情報と五感が頼りの個人旅行には「彷徨う」という形容が似合っていたと感じる。そんな旅にスーツケースの定番は無かった。

社会人になってからもリュックサックは生活の相棒だ。弁当の作り手は母から妻に変わり、体操服が作業服になった。財布の中身は学生時代より乏しくなった様に思える。帰路はスーパーで買った食材を詰めることも多い。しゃれた手提げ鞆よりもリュックサックの方が圧倒的に使いやすいのだ。

かと言ってリュックサックに対するこだわりは無い。近年は専ら子ども達のおさがりを使っている。ファッションのアイテムとしてリュックサックを選ぶ彼らにとって、相棒との蜜月は長く続かないのだろう。ほつれやボタンの外れは小学校家庭科仕込みの手縫いで補修してやる。

使い始めに違和感を覚える物もあるが、使用しているうちに私の背中になじんでくる。もしかしたら私の背中がリュックサックになじむのかもしれない。

これから何個のリュックサックと付き合うことになるだろう。あと三十年歩けるとすれば五個や六個は必要になりそうだ。

もう少し齢を取ったら材質にだけはこだわりたいと思う。見た目や機能性ではなく、最後の相棒を棺の中に入れてもらうために。